

学びの風便り

リーディングスクール通信63 R8.5.29(金)



発行：松本市教育委員会 教育研修センター

松本市では、今年度より全小中学校で「みんなの未来の学校」の実現を目指し、みんミラ事業がスタートしました。その中で、昨年度からリーディングスクールとして先進的な取り組みを実践しているリーディングスクール8校の様子をお伝えするお便り「学びの風便り」をお届けします。各校の工夫を凝らした意欲的な取り組みや学校づくりのアイデアが、松本の全ての学校の新たな挑戦への気風の一助になれば、うれしく思います

学びの改革のあゆみ 梓川小学校・並柳小学校

梓川小学校 ～自ら動き出すあずさっ子の具体の姿を求めて～

梓川小の研究の方向性？：4者の協議から生まれた共通言語！

乾校長先生はじめ新しく11名の教職員を迎えスタートした梓川小学校。4月中旬、「学校の研究のあゆみと今後の方向について知りたい」という校長先生の声に応え、山守研究主任、竹内教務主任、松尾教頭先生の4名で、これからの研究の方向性について語り合う協議の場が設けられました。

冒頭、研究主任が「主体的に学ぶ子を育むために、その子がその子らしく学ぶ探究的な授業の実現」に向けた歩みを語ると、「りんごの活動を通して、子どもたちからたくさん学び、先生方からもアイデアをいただき、ともかく楽しかった」と笑顔で振り返る教務主任。「梓川の研究は、小グループで楽しそうに語り、和気あいあいやらされ感がないのがいい」と温かな空気感を語る教頭先生。対話は自然と、「子どもが探究的に学ぶ姿ってどんな姿なのか？」という本質的な問いへと進みます。校長先生が「子どもの心が動く瞬間ではないか」と語ると、研究主任は自身のこれまでの実践を踏まえ、「グランドデザインにある“自ら動き出すあずさっ子”を目指して探究的な実践を重ねてきたが、自ら動くのは、子どもの心が動いたかではないか」と投げかけました。この発言を受け議論はさらに深まります。先生方の想いが重なり合い、梓川小のこれからの研究を導く道標として、「子どもの心が動き出す瞬間」という共通言語が大きく浮かび上がりました。



探究的な授業の構想「子どもの心が動き出す瞬間をもとめて」

5月14日、今年度の研究の第一歩として、「①職員の間を深めること！②総合的な学習で教師も子どももわくわくする活動のアイデアを出し合うことを通して、この先の見通しをもつ！」を目的に、校内研修会が実施されました。研究主任による、心ほぐれるアイスブレイクから始まった研修は、終始和やかな笑顔に包まれました。研究主任は、自分が実践を通し探究し続けた「問い」について語りました。



同僚のA先生やリーディングスクール・ラボで「先生の言う主体的な学ぶ子どもの姿とは？」と聞かれ立往生した自分がいた。その後、A先生の助言から、休み時間にも意欲的に野菜の栽培活動を行う子どもの姿をみるよう心がけると、「子どもの心が動いた瞬間」だったのではないかと気づき、研究テーマを設定しました。校内中間発表や最後のポスターセッションで「子どもたちの心が動いた瞬間」を語り合えると嬉しいです。

その後、「探究的な授業づくりの構想について、他の先生たちから知恵やアイデアをもらいたい」と手を挙げた有志6人の先生が、それぞれのテーマを提案。掲げられたテーマは、「地域の人たちとの交流・畑・りんご・カフェ・りんごを使ったパイ作り・ピザづくり・番組作り」と魅力的なものばかりです。先生たちは、自分が一緒に考えてみたいテーブルへと赴き、ラウンド形式で対話を重ね、模造紙に関連する活動や言葉をつないだり、グループに分け整理したりする「ウェビングマップづくり」にチャレンジしました。研究主任研修で学んだラウンドスタディの手法を活用し、メンバーを変え、2回のラウンドを行いました。「こんな授業ができれば楽しそう！」そんな自由で創造的な発想を大切にしながら対話を深めていくと、提案した先生自身も思いもよらなかったような、豊かな単元構想が次々に生まれました。



「子どもの心が動き出す瞬間」の姿をもとめて、梓川小では先生たちの探究が今、スタートしました。これから子どもたちと先生たちがどんなワクワクに出会い、ともに学びを創り上げていくのか、本当に楽しみです。

並柳小学校 ～「やってみたい！」がつながる、あたたかな学校づくり～

並柳小学校がリーディングスクールの指定を受けて 2 年目を迎えました。昨年、ゼロからみんなで耕してきた「土壌」をもとに、今年は先生方一人ひとりの「やってみたい！」という気持ちが心地よくつながり、活気あふれる学校づくりが進んでいます。

【先生みんなが同じ土俵で語り合えるチーム】

今年度の並柳小学校の体制には、昨年の経験をしっかりと引き継ぎながら、さらにパワーアップしたつながりが見られます。教務主任の中川先生(昨年は研究主任)は、学校全体の教育課程と研究をつなぐ頼れる大黒柱。研究主任の鈴木先生(昨年は副研究主任)は、先生方のリアルな願いに寄り添い、安心できる場を作っています。そして、副研究主任の百瀬先生は、具体的な授業づくりをすぐそばであたたかく支えています。この 3 人を中心に、若い先生もベテランの先生も、みんなが同じ立場で楽しくおしゃべりできる一体感が生まれています。

今年 1 年生の担任になった鈴木先生。忙しくてなかなか気持ちに余裕がなかった 4 月に、周りの先生たちが温かく支えてくれたそうです。その体験を通して、今度は「私も、もっと先生たちのために」と貢献意欲が高まり、先生方が楽しく過ごせる学校づくりに意欲的に取り組んでいます。



【普段のコミュニケーションが生んだ「阿吽(あうん)の呼吸】

鈴木先生とお話する中で、とても印象的なエピソードがありました。5 月に学区にクマが出没するというハプニングが起きた際、その場にいた先生たちでパッと連携し、即座に対応できたそうです。これは、4 月のスタートから一方通行ではない「対話」を徹底して積み重ね、普段からお互いのことをよく知り、何でも言える関係を作ってきたからだと言います。ピンチの時にも最高のチームワークが発揮され、課題が出てもすぐにみんなで解決していく。この「みんなで学校を動かしている」という一体感が、今の並柳小学校の大きな強みなのでしょう。このあたたかい空気があるからこそ、新しく赴任した先生方も驚くほどスムーズに輪に加わっています。

【「やってみたくなる研究に！」みんなでワクワクする研修】

5 月 19 日に行った校内研修会(「あのね広場」)では、「研究が辛いものになっては進まない。とにかく楽しくないと！」という鈴木先生の強い願いがこもった、安心できる場が作られました。子どもころのワクワクを思い出すチェックインから始まり、付箋を使ってアイデアをどんどん出し共有するワークなど、先生方は終始笑顔と弾む会話でいっぱいでした。

このような研修を通して、先生方の心にも素敵な変化が生まれています。7 月に行う授業公開に向けて、「やってみたい先生はいますか」と声をかけると、なんと 4 人の先生方が立候補したそうです。「授業をすると楽しい、良いことがある」という昨年の経験が、先生方のやる気を引き出しています。

並柳小学校の一番の良さは、研究が「やらされること」ではなく、先生方自身の「ワクワク」を原動力にした「楽しい学校づくり」そのものになっている点です。それぞれの先生が、自分のペースのまま認められ、手を取り合う姿は、これからの校内研修のあるべき姿を鮮やかに示してくれています。

